

## 柳宗悦のアイヌ二論について —「オリエンタリズム」との関係から—

上野昌之

### 序

かつてアイヌ民族は「滅び行くもの」とされ、その文化はいずれ消滅するものと考えられていた。消滅の前に記録することがアイヌ文化に対し行なわれていた学問的な対応であった。そうした中、民藝活動の提唱者柳宗悦<sup>(1)</sup>は、アイヌの文化に対して他と異なる発言をしている。柳は、戦時中アイヌ民族・アイヌ文化について「アイヌの見方」<sup>(2)</sup>と「アイヌ人に送る書」<sup>(3)</sup>という二論文を発表した。アイヌ文化のなかでとくに工芸の価値を見極め、その保存奨励を説くとともに、アイヌ民族の存在意義を日本社会に唱え、アイヌ民族が誇りをもつことを鼓舞した。明治以降社会的に見下され蔑まれてきたアイヌ民族について、柳は新たなアイヌ観を打ち立てた。柳の発言は以後の日本社会に影響を持ち、アイヌ自身も工芸を自らの文化的指標のひとつとして工芸を考えていくことになる。

しかし、柳の見方にはアイヌ民族・アイヌ文化を考える上で避けて通ることができない問題をはらんでいた。つまり、柳という日本人がアイヌ文化を見出し、規定したという点である。というのは、ある民族の文化について語る時、任意の表象を抜き出し、それを文化と称することにはいつも恣意性が付きまとうことになるからである。柳がアイヌ文化を語る時にもこの恣意性が付随していたのではないだろうか。民族文化を規定することは、民族を規定することと密接に関連し、当事者の思想や生活、生き方全般にかかわることである。場合によってはきわめて政治的なことすらある。今日アイヌ民族の尊重とその文化の振興が図られているが、アイヌ民族でないものが、アイヌ文化という異文化を規定し、それへの振興策を実施するということには、無意識のうちに認識のずれが生じたり、差別の構造もしくは支配的な構造が隠されていたりするのではないだろうか。

以上のような点を踏まえ本稿では、柳宗悦のアイヌ民族についての二論文から柳のアイヌ民族やアイヌ文化のとらえ方、そしてそれがもたらす影響について考えていく。柳が展開したアイヌ文化への視点は、独自性を尊重し、相互に理解していこうとする考え方がある。これは多文化主義による異文化理解に近いものがあり、異民族と異文化を論じる上で示唆に富むものである。しかし、その中には恣意性や偏り、無意識の政治性があったのではないかと考えられる。これが今日的なアイヌ観やアイヌ文化振興に影響を与えていることを明らかにしていく。これらを考える上でエドワード・サイード(Edward W. Said)の『オリエンタリズム』("Orientalism")を参照し、他者を表象することの意味とその影響という視点から柳のアイヌ民族についての二論文を考察することにする。

柳は朝鮮や沖縄の人々について数多くの論考を発表している。しかし、アイヌ民族についてのものは上記の二つの論文が中心となる。アイヌ民族についてのこの二論に関しては、幼方直吉<sup>(4)</sup>や森田俊男<sup>(5)</sup>が政治的、社会的な側面から肯定したり、中見真理がアイヌの自己蔑視を廃し、エンパワメントをはかろうとする観点があったと評価したりしている<sup>(6)</sup>。一方で、熊倉功夫のように美についての批評の域を出なかったとその不十分さを指摘しているものもある<sup>(7)</sup>。柳とオリエンタリズムの関係を美学的視点から言及した柄谷行人は、柳の美における政治性を指摘しており、興味深いものとなっている<sup>(8)</sup>。ここではこれらの論考を踏まえ、柳がアイヌ民族へ投げかけた視線、つまり彼らをどのように把握していたのかという観点から考察し、柳の発言がアイヌ民族やアイヌ文化を理解する上でいかなる影響があるのかを考えていくことにする。

まず、柳の二論について検討し、それらから柳がアイヌ民族をどのようにとらえていたかを考察していく。その際、柳が行った朝鮮や沖縄への発言も踏まえて、アイヌ民族への論考を考えていくことにする。それは、柳のアイヌ民族に対する考え方が、沖縄、朝鮮の人々に対するものと共通性が有ると考えられるためである。

そして、つぎに柳の発言がもつ政治性について、他者を認識するあり方をもとに、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』に依拠して考えていく。これは、柳のアイヌ民族への見方が、他者を表象としてとらえ支配していく、サイードのいう「知」と「権力」との関係を示しているのではないかと考えられるためである。

なお、本稿はアイヌ民族の文化と教育をめぐる諸問題の考察の一貫として、日本人や日本社会がアイヌ民族をどのようにとらえてきたのかを柳論文を通して検討するためのものである。

## 1. 柳宗悦のアイヌ 二論

1941（昭和16）年9月から11月にかけて駒場の日本民藝館において「アイヌ民藝品大展観」が開催された。これは杉山寿栄男・金田一京助篇による『アイヌ藝術』の刊行を記念して開かれたものである。ここに展示された工芸品は杉山の所蔵するコレクションを芹沢銈介が選択したものであった。柳は雑誌『工藝』で2回にわたり特集号を組み、このときの展示品を網羅するとともに、自らのアイヌ論文を二稿掲載している。

柳がアイヌ工芸に最初に触れたのは、1912（明治45）年の東京での拓殖博覧会のときではないかと考えられる<sup>(9)</sup>。しかし、全国を廻り民芸を調査していたとき、北海道では新しい土地ということと土着のものを認めず、アイヌ工芸への言及はしていない<sup>(10)</sup>。民芸を日本の伝統技術という枠組みでとらえ、アイヌ工芸は異民族の工芸として区別していたと考えられる。その後どのような経緯でアイヌ工芸に関心を持つに至ったかは定かではないが、杉山寿栄男をはじめ金田一京助や当時のアイヌ研究者との交流も深く、アイヌ民族についての造詣は深まったのであろう。

柳のアイヌ二論は、『工藝』百六、百七号に連続して掲載された。前者に掲載したのが「アイヌの見方」であり、次号が「アイヌ人に送る書」である。両編を通しアイヌ民族とその工芸を高く評価し、

日本人のアイヌ民族への敬念を喚起している。当時一般的にアイヌ民族は、文字をもたず、生活程度が低く、衛生観念に乏しく、道徳観念もない人々などと蔑まれており、劣等な種族と考えられていた。だが、アイヌ手工芸の蒐集が行なわれていたように、一部ではアイヌ民族への関心は高かった。アイヌ研究では人類学や民俗学的なものが行われており、金田一京助が知里幸恵の『アイヌ神謡集』を出版し、アイヌ語研究が途についていたといえる<sup>(11)</sup>。この頃のアイヌ研究の特徴は、金田一のアイヌ語の研究も人類学や民俗学者の研究も、アイヌ民族やアイヌ文化はやがて滅びてしまうものという認識に立ち、記録に残すということを主たる目的としていた。かかる状況下で柳のアイヌ民族に対する見方は他と異なるものといえる。

先に出された「アイヌの見方」は、日本人に対しアイヌ民族を考える上での視点を提示するものといえる。柳はここで、「彼等の中に価値あるものを見出す時ほど、正しい見方を有ち得る場合はない」<sup>(12)</sup>と、日本社会の中で蔑み見下されているアイヌ民族に価値を見出す必要性を説き、アイヌ民族の価値を展開した。柳はアイヌ工芸に注目し、その中に近代化の進んだ日本人が失ってしまったものをいまでもっており、それを学ばなければならないと説いた。アイヌ工芸に内在する美に「虚偽がない」「不誠実さがなく」と賞賛し<sup>(13)</sup>、原始的なものの中に「創造的な本能が力強く働いている」<sup>(14)</sup>と、文明との対峙を示した。そこには当時西洋芸術で語られていた原始芸術への憧憬が垣間見られる。アイヌ民族の木工品や衣服に施された模様の中に、柳は美的価値の優越を認め、文化の進んでしまった文明人では作ることができなくなったという芸術的な質の高さを強調した。柳はアイヌ民族のもつ美的創造性の高さを、その価値として見出しているのである。そして、アイヌ民族が質の高い美を生み出すのは、「切実な信仰が、背後に働いてある」からであり、宗教のもつ禁制への恐怖が、アイヌ民族を道徳的にし、不誠実なことを行なわせない。これが生活や仕事に反映され、偽りのない工芸品の質の高さとして表れるのだと考え、「信が産む美」と位置付けた<sup>(15)</sup>。柳はアイヌ民族の宗教へ具体的な言及はしていない。しかし、こうした考えのもとには、アイヌ語研究を通してアイヌ民族に精通した金田一の影響を見ることができる<sup>(16)</sup>。さらに「真実なるものの内在」<sup>(17)</sup>がアイヌ民族の作物を美しくさせるという柳の考えは、逆に信仰を失った文明人を問い正すことにもなっていた。

このように柳は、アイヌ民族を文化から遅れた悲惨な種族と蔑む見方を否定し、滅び行くものへ憐憫の情を抱くことも一つの見方ではあるが、信仰に裏打ちされた美的創造性の価値を見出しそれに敬念を抱くことが、日本人がアイヌ民族に対する姿勢であり、正しい見方だと論じたのである。

一方、柳はもう一つの論文「アイヌ人に送る書」でアイヌ民族に対して語りかけている。こうした語りかけは、論文「朝鮮人の友に贈る書」や「沖縄人に訴ふる書」にも見られるもので、柳が彼らの隣人としてあることを示すために用いられている。このアイヌ論文の冒頭で柳は、一人のアイヌを想定して彼がおかれているであろう現実を悲痛なまでに具体的に示し語りかけた。朝鮮人や沖縄人を参照しながら、アイヌの生き方、柳たち日本人の務めを提示し、アイヌ民族のおかれている困難な状況を解決するにはどうしたらよいかを示した。

日本がこれまでに行ってきた諸策<sup>(18)</sup>を当然なすべき行為とし、逆にアイヌ民族は「日本に歩み

寄ったか」と問うた。為政者的な発言ではあるが、これらが柳の求めるものではない。こうした「歩み寄りが果たして根本的な解決になるか」と柳は疑問を呈したのである<sup>(19)</sup>。必要なことは、日本人が、自分が「若しアイヌ人であったなら」と考えることであり、「互が互の価値を認め合ふこと」だと論じた<sup>(20)</sup>。アイヌを差別をする社会はもとより、学者がアイヌ民族を研究対象と見る見方に対し、その修正を求める批判といえる。アイヌ民族には同情を越えたものが必要であり、それが「アイヌに活力を植え付ける具体的な協力」であり、彼らに「自信を与える材料を示す」ことであると主張した<sup>(21)</sup>。アイヌ民族は「天賦の工人」であり、日本人のような文化人がすでに失っている手工芸の本質的な性質を保っている。したがって何も恥じることはなく、この徳性の上に手工芸の領域でなすべき仕事をすれば、大きな未来があるとアイヌを励ますのである<sup>(22)</sup>。そして、論文を掲載した『工藝』に特集号を組んだ二つの目的を示した。一つはアイヌ文化に学ぶべきことが多いかを社会に知らせ、日本の文化に病的なものが多く、退化してしまったことを反省させることであり、他方が日本人の中にアイヌ芸能に感嘆するものが多いことをアイヌ民族に知らせたかったからだと述べた。そして、これによりアイヌ民族が自覚を呼び醒まし、「民族の誇り」を掴むことを期待したのである<sup>(23)</sup>。

これら二論から柳がアイヌ民族をどのようにとらえていたかを考えていく。まず、「アイヌの見方」では、柳は、手工芸に表れたアイヌ民族の美的な才能にその価値を認め、これが敬愛の念に値するものであることを日本社会に主張した。柳は杉山コレクションという質の高いアイヌ工芸を熟視しており、アイヌ民族のもつ芸術的力は疑い得ないものであったのだろう。ここに漏れ落ちた無数の工芸品があったとしても、優れた工芸品を作る技を信じる柳にとってそれは問題ではなく、アイヌ民族はだれもが優れた工人であった。柳は『手仕事の日本』の中で、民芸を作る職人の多くが教育も乏しく、識見も有たないが正直で信仰の人であるから、祖先の経験や智慧に助けられ、力のある仕事をなしたと功績を称えている<sup>(24)</sup>。すぐれた工芸品を作る職人に向けられた眼差しが、そのままアイヌ民族へも向けられているといえる。つまり、いまだオーセンティックなものを作り出すことができる人々とアイヌを措定し、そこに優れた工芸品を作り出す「職人」としてアイヌ民族をとらえていると考えられるのである。

柳は一貫してアイヌ工芸の卓越さを強調し、その価値を訴えた。「アイヌ人に送る書」では、「なぜもっと卓越した伎倆をもつ手工芸の領域で、アイヌ民族の発展を援助しなかったのであるか」<sup>(25)</sup>と語る。当時のアイヌ民族の境遇を踏まえ、日本人がアイヌ工芸の発展に寄与してこなかったことを悔いてさえいるようである。こうした柳の発言は端々で見ることができる。しかし、柳のアイヌ理解とはアイヌ民族への理解であったのであろうか。これより前に柳は沖縄へ琉球文化の調査をしに訪れている。ここで琉球語の存続をめぐる県庁の職員等と論争を繰り広げた。いわゆる「沖縄言語論争」である。このとき柳の立場は、日本語の古い形を残す琉球語の言語的重要性を強調し、その価値を擁護するものであった。そしてその保持よりも日本語化による社会発展を希求する沖縄の人々と対立していった。柳にとって近代化は古来からの文化の源泉を失うことにほかならず、その保持は至上の命題でもあった。柳が貴重な文化の継承を願う気持ちは純粋なのだが、彼にとってアイヌ民族も沖縄人も

伝統的な文化を継承する母体でしかない。柳にとって彼らは生活し変化する動的な人々ではなかったのである。

朝鮮の人々に対して、その陶磁器の美から彼らを解釈したように、アイヌ民族についても木工や着物の模様から、かれらの人間性を論じた。そこには生きた人間との対話は介在せず、柳の観念の中でのみ彼らは存在していた。熊倉功夫は柳の発言に「あくまでその美についての批評の域を出なかった」と評し、「果たしてアイヌに対して二人称的なものに進みえたであろうかと」疑問を呈している<sup>(26)</sup>。つまり、アイヌ民族に向けられた視線は、実態としてのアイヌ民族を映し出すことはなく、彼自身の美意識の投影に過ぎなかったといえるのである。柳は異民族、異文化を直感的に受容し、彼らの視点から語ろうとするのだが、柳の視線は彼らの生み出した文化財に注がれ、文化財を介し、背後にある人々を意識するプロセスをとるため、彼らと直接的に結びつくことが困難であったのではないだろうか。

さらに、これら論稿の中で柳が発したメッセージは、アイヌについての語りばかりでなく、日本人自身について語っていることに注意しなければならない。アイヌ工芸の質の高さに敬愛の念を抱くことで「彼等を吾々のなかにも甦らすことになる」<sup>(27)</sup>とし、着物を例にとり、われわれの「美しさの格をアイヌの着物の有ってある格にまで高めよ」<sup>(28)</sup>と日本文化のあり方を言及する。さらに、アイヌ文化を評する意味を「吾々の文化をいやが上にも向上せしめる為に、彼等を寧ろ師とし学ぶべきもののあることを見出すべきではないか」<sup>(29)</sup>と述べるのである。これらから、柳はアイヌ文化の質の高さを評価しながらも、その語りの目的が近代化により衰退したと考える日本文化の様相を変えるために用いられている点を見逃してはならないだろう。

では、こうした柳のアイヌ民族への視線は意味のないものなのであろうか。幼方直吉は、柳のアイヌ民族に「民族の誇り」を喚起するその姿勢を、戦前のアイヌ同化政策についての最初で最後のきびしい批判であったという<sup>(30)</sup>。当時の日本の民族的ナショナリズムの席捲する時代に被支配民族を擁護する発言をすることは、社会的制約から難しかったものと予想される。そのような状況下でアイヌ民族へ光を当てた功績はけっして小さくない。柳を突き動かしたのは、「民族とその文化の尊厳・自主性はおかされない」<sup>(31)</sup>という、民族の尊厳に対する揺るぎない信念であった。お互いが相手の立場に立ち、互いの価値を認め合うことが必要であると説く柳の思想は<sup>(32)</sup>、今日求められる多文化主義に通じる思想でもある。当時、アイヌ民族の独自性を尊重する観点を示しえた人物はきわめて少なかった。中見真理は柳を「少数民族の文化の問題が、社会的境遇の改善を伴う主流文化への包摂だけによっては解決できないことに、近代日本の中でもっとも早く気づいた人物の一人であった」と評価している<sup>(33)</sup>。このようにアイヌ民族への柳の投げかけた視線は、アイヌ民族のおかれた社会矛盾を浮かび上がらせる役割も果たしていたのである。

これまで見たように、柳が1941、42年に発表した「アイヌの見方」と「アイヌ人に送る書」の二論は、アイヌ民族を蔑み、滅び行くものとしてみる日本社会に対し、アイヌ民族の価値を見出し、理解しあうことの必要性を訴えるとともに、アイヌ民族の誇りを尊重し、その地位を向上させようとア

アイヌ民族を鼓舞する書であった。当時の状況下では柳の発言は、内的な人間責任の顕れであり、他に類例を見ないアイヌ民族を尊重したものであった。しかし、そうした一面はあるものの、アイヌに向けられた視線は現実のアイヌではなく、オーセンティックを求める彼の美意識の投影であり、アイヌ民族の存在は優れた工芸品をつくる工人としての視点からしか語られることがないという限界性をもつものであった。そして、その価値は近代化が進み、低い質のものしか見出すことができなくなった日本の民芸への警鐘として対比されているという側面をもっていたのである。

では、こうした見方は、柳独自のものなのであろうか。異民族やその文化を考えると、他者が向ける視線について、サイードの「オリエンタリズム」の観点から検討していくことにする。

## 2. 柳に見られるオリエンタリズム

柳は戦前の日本の支配下にあった諸地域の民族やその文化に対し、優れた文化的な功績をもとに敬愛の念を抱き、擁護している。これは当時の状況を考えると、きわめて勇気の要ることであり、彼のヒューマニズムに裏打ちされた内的な発露を感じさせるものである。しかし一方で柳の発言には、随伴する無自覚な差別性を感じざるを得ない。これが柳の個人的な志向に由来するものであれば、異民族・異文化に注がれる特異な眼差しということもできるが、必ずしもそうとはいえない。これは対象となる他者認識のあり方に起因するものといえるのではないだろうか。そこで次に、他者認識のあり方についてエドワード W. サイードの『オリエンタリズム』の観点から柳の言論を再考してみたい。

サイードによれば『オリエンタリズム』は、「東洋（オリент）」と「西洋（オクシデント）」とされるものとのあいだに設けられた存在論的・認識論的区別にもとづく思考様式<sup>(34)</sup>であるとする。西洋がオリエンタリズムを理解する上での思考様式といえる。西洋のオリエンタリズムについての「知」が言説を形成し、オリエンタリズムを規定していく。これが様々な権力と結びつきながら、支配の様式を形成していった。サイードはこの知と権力の結びつきを多方面から分析し、批判した。オリエンタリズムは、それ自体が自己目的化し、オリエンタリズムについてのイメージを補強し、再生産し、西洋がオリエンタリズムを支配する様式となっていた。オリエンタリズムとは、「地政学的知識を、美学的、学術的、経済学的、社会学的、歴史学的、文献学的テキストに配分」し「我々の世界と異なっていることが一目瞭然であるような世界を理解し、場合によっては支配し、操縦し統合しようとさえする一定の意志または目的意識そのもの」であり、「多種多様な権力との不均衡な交換過程のなかで生産され、またその過程のうちに存在する」言説であると規定した<sup>(35)</sup>。そして、西洋はこの言説を通してオリエンタリズムを眺めていくことになる。オリエンタリズムについて作り出された権威は、審美と評価の基準を確立し、真理として威信を与えた思想から再生産が繰り返される<sup>(36)</sup>。このプロセスの中でオリエンタリズムは、マルクスの「彼らは自分で自分を代表することができず、誰かに代表してもらわなければならない」ということばに示されるごとく、代替された表象として描写される<sup>(37)</sup>。

オリエンタリズムの思考様式は、東洋と西洋の二項対立である。西洋の規定するオリエンタリズムは常に、非合理、墮落、幼稚、異常、愚鈍、劣勢、虚偽、不正確、不誠実などとマイナスにイメージされ、

東洋人は自発性に欠けた「従属的種族」と位置付けられた。そして、これと正反対な性質をもつものが西洋ということになり、西洋はオリエントの対立イメージとして自己措定されることになる。これにより、西洋に解釈され表象された遅れたオリエントは、西洋によって手を差し伸べられる存在とされ、オリエンタリズムはレイシズムとエスノセントリズムを内包し、植民地主義を正当化する論理となっていた。

『オリエンタリズム』のなかでサイードは、他者を表象し、表象を生産しつづけていく「知」のあり方を問題とした。オリエンタリストたちこそが、オリエントを知りその代弁者になりえた。これこそが西洋による「知」のオリエンタリズムの政治性であり、支配の論理であった。ここにサイードのオリエンタリズムへの批判点があるといえる。この視点からあらためて柳のアイヌ二論を振り返ることにする。

柳の論文は、日本人から見たアイヌ民族という構図をとり、他者の表象を生産していったといえる。ここで柳は劣等視されたアイヌ民族を優れた工芸を作る人々とし、その価値を位置づけた。それまでアイヌ民族の卓越さを表す言論は、金田一京助がユーカラの価値を位置づけをした以外にはほとんどみることができないが、柳という知識人がアイヌ民族の美を強調したことで、アイヌ民族についての新たな言説を作ったということになる。

そこにはアイヌ自身ではみずからを見出すことができないという前提があり<sup>(38)</sup>、柳は代弁者としてアイヌの美の価値を広めていった。アイヌ民族の価値を規定する主体は、金田一や柳という日本人であり、アイヌ民族は彼らが語る対象物でしかなかった。そこにサイードが示したオリエンタリズムとしての知と権力との関係を見ることができるといえる。柳は同化政策を強く批判するのだが、アイヌ民族を日本人と対等な他者としてはとらえてはいない。文明と対比される存在として、オリエンタリズム的二項対立のなかでアイヌの美的領域での価値を主張することになる。「不服なのはアイヌをただ文化から遅れた悲惨な種族だと見るその見方だ」と発言しアイヌの美を称えるが、アイヌ工芸を原始工芸とし、アイヌ民族を文明の対極として規定しているのである。柳の原始的なものの中に真正を見出そうとするその姿勢そのものが、当時流布していたダーウィニズムの中にあり、近代化の陰で滅び行くものというアイヌ民族に伏された言説を再生産することになっていたのである。

柄谷行人は、オリエンタリズムのあり方から権力と結びつく「美」の効用を展開している<sup>(39)</sup>。「最も植民地主義的な態度は、相手を美的に、且つ美的にのみ評価し尊敬さえすること」<sup>(40)</sup>である。多くの審美主義者と同様に柳の発言にも、こうした面が見られる。これは柳が植民地主義者かということではなく、彼の認識のあり方の問題である。柳が朝鮮について「偉大な美を生んだ国、偉大な美をもった民衆が生活している」と示した例は、「美的関心は「異者」としての驚きを何一つ与えないごくあたり前の「他者」がそこに生活している、という事実を認めない」ことを意味し<sup>(41)</sup>、この審美的な発想が韓国人から批判される場所であるという<sup>(42)</sup>。つまり、被支配民族を美的に強調することには、審美主義と植民地主義の共犯関係が成立し、柳はそれに対し無自覚であったといえるのである。柳が政治的ななかかわりを排してきたことは、当時の政治状況から考えたとき、言論を守る上で敢

えてとった行動であったかもしれない。だが、それゆえに植民地主義に加担してしまったとしたら皮肉なことである。

柳の観点はアイヌ民族においても同様な認識を示している。アイヌ工芸の卓越さを発見し、その価値を認めていくという姿勢は、朝鮮の扱いと変わらない。アイヌ民族に「民族の誇り」を喚起するのだが、そこでは美的価値を至上のものとして、その他の価値は言外に据え置かれてしまった。柳はこのことで生じてくる政治性について無自覚であった。アイヌ民族に敬愛の念を示しながらも、アイヌ民族の美とその美のあり方を日本の中に取り込み、近代化によって失われた日本の美を再生しようとする姿勢は、知を支配する権力性を示すものといえる。

柳は戦後1947（昭和22）年に白老を訪れるまでアイヌ民族とかかわったことが無かった。柳は現実に生活する「ごくあたり前のアイヌ」との対話を持つことがないままに、アイヌの代弁者としてアイヌを語ることになる。柳の語りの中にどこまで現実に生きるアイヌが存在していたのだろうか。にもかかわらず、柳の語りの中で作られたアイヌ民族の姿が真実のものとしてされていくのである。木工芸や刺繍に秀でた才能をもつアイヌが一般的なアイヌ認識の中に刷り込まれていった。もちろんそこには現実に生きるアイヌ民族への視線はなく、柳によって作られたアイヌ民族を美的に賛美する言説が、これまでのアイヌを劣等視するアイヌ認識と融合し、差別と憧憬との両義性を備えるものとなっていった。

柳の生み出したアイヌの言説は、アイヌ工芸への賞賛にとどまらず、アイヌ民族とその文化の尊重という言説へ広がっていく。森田は、1960年代からつづくアイヌ人の解放運動のなかで民族としての尊厳と権利の確立のために、柳の思想を引き継ぐことを求めた<sup>(43)</sup>。幼方は「今日のアイヌ観として受けつがるべき貴重な遺産」<sup>(44)</sup>と評したりしたことはその現われである。そして、柳の言説を最も反映しているのが、1997年に制定されたアイヌ文化振興法であろう。そこには「アイヌ民族の誇りが尊重される社会の実現と国民文化の一層の発展」が掲げられ、アイヌ文化の卓越さが強調されている。しかし、対象とされる文化にも恣意的な選択が行なわれているといえる。そしてアイヌ文化を振興することがアイヌ民族の誇りの獲得と結び付けられ、アイヌ民族・アイヌ文化の価値が、国民文化の発展に寄与するものと位置づけられていく。ここには「知」の代弁から「知」の支配へと連なるオリエンタリズムに内包された政治性が見てとれる。

以上のように、柳のアイヌの言説は、サイドがオリエンタリズムとして批判した、他者を表象し、生産しつづける「知」のあり方の中に問うことができる。柳はアイヌ民族の「知」の代弁者として発言し、アイヌ民族に創作的な美的価値を付与した。そして、劣ったものを美的に尊重し支配する権力のあり方と無縁でなかったことを柄谷のオリエンタリズム論から導いた。柳が生み出した言説はこれまでのアイヌ民族を劣等視する差別の言説と対になり、アイヌ民族をめぐる差別と憧憬という両義的な言説が形成された。そしてやがて、アイヌ民族の解放や差別一掃の活動の中でアイヌ文化の卓越さやアイヌ文化の尊重が唱えられるようになり、国家的にもその言説のもと政策が展開されていくという政治性を指摘した。



## 結

これまで、1では柳のアイヌ民族に関する二論を検討し、柳のアイヌ民族の見方を指摘した。それによれば、工芸の卓越した造形性をアイヌ民族の価値と認め、それを尊重していくことが説かれていた。柳はアイヌ民族の立場に立つ必要性と相互理解の重要性を説き、アイヌ民族の誇りを喚起していった。しかし、アイヌ民族に美的な価値しか認めえぬ限界と日本の民芸を再興するための対象としてアイヌ民族の美を用いた点を明示した。2では、『オリエンタリズム』の観点から他者を表象し、生産しつづける知のあり方を問うた。柳の発言はアイヌ民族の代弁者として、アイヌが美的な価値をもつという新たな言説を作りあげていった。しかし、そこには現実のアイヌ民族の姿が隠蔽されるという政治性が付随していた。そしてアイヌの言説は、これまでのアイヌ差別の言説との両義性を有することになり、今日において両者を一体化し政治的に利用されていることを指摘した。

オリエンタリズムは他者を表象し生産しつづけていく「知」のあり方を問題とした。表象されるアイヌ・アイヌ文化は、日本人が作り出した言説によって代替し表象されたものである。アイヌ民族についての語りは日本人という主体が、その「知」の中から作り出した表象であり、実際とは必ずしも一致するものではない。日本人の言説のもとでのアイヌ・アイヌ文化であるといえる。主体と対象とのあいだの強弱関係が、言説の流通と消費のプロセスの中で権力関係を追認し、アイヌ自身もこの言説に従属化を求められることになっている。つまり、金田一はユーカラを称え、柳は「天賦の工人」とよんだが、これが言説として流布するなかで、卓越した文化を有するアイヌという表象が定着し、口承文芸と手工芸がアイヌ文化の指標となったのである。現実のアイヌ民族やアイヌ文化の総体は忘れ去られ、表象としてのアイヌと取捨されたアイヌ文化のみが流布することになった。そして、日本人により権威づけられた指標をアイヌ民族自身も自文化として受け入れ、再生産を行なっていくことになる。しかし、表象としてのアイヌと現実との乖離に違和感を覚え、アイデンティティを求めつづける人々もいるのである。近年アイヌ民族をエコロジカルな民族とするあらたな言説が流布し始めているが、ここにも同様な回路が潜んでいるといえるのではないだろうか。

柳のアイヌ二論により生み出されたアイヌ民族への差別と憧憬の言説は、今日われわれの思考を規定するものとなっている。それをいかに昇華させていくかが、問われていることと考えられる。

今回柳の論稿の中でアイヌ民族に関する二論文について考察を加えた。ここでは柳の思想の一端に触れながら、日本人がアイヌ民族をどのようにとらえていたかということに焦点を絞り考察を試みた。しかし、こうしたアイヌ民族への語りかけが当時アイヌ自身にどのように受け取られたかを検証することはできなかった。この点は今後の課題としたい。サイードの『オリエンタリズム』については、柳の論考を解釈するために「他者を表象すること」そして「知と権力の関係」を参照するだけに終っている。長大な論考であり十分に咀嚼できたとはいえない。アイヌ民族と日本との関係はポストコロニアルの視点から語ることが不可欠のことだと考えられ、今後そうした観点から考察を重ねてい

きたいと考えている。

註(1) 柳は1889年東京で生まれ、白樺派の同人として文筆活動をはじめた。キリスト教神学や心理学に興味を持つとともに、西欧近代美術の芸術論も展開している。バーナード・リーチ (Bernard Leach) の影響を受け、ロマン主義の詩人ウィリアム・ブレイク (William Blake) やホイットマン (Walt Whitman) などの英米文学へも傾倒していくことになる。ウィリアム・ブレイクの直感を重視した思想が、芸術と宗教の融合した柳の思想を形作る上で重要な要素となっている。1914年には植民地の朝鮮の陶磁器に魅せられ、朝鮮の仏像、工芸品への関心を深め、朝鮮の美を作りだしているのが無名の工人であることを指摘し、普通の朝鮮の人々への深い敬愛の念を持つに至った。朝鮮工芸の「発見」は、他方では木喰仏の「発見」に連なり、これまで見向きもされてこなかった人々の暮らしの中にある日常性の中に美を「発見」していった。柳はこうした美の価値を「民藝」とよび、工芸品の持つ文化的価値を見直していった。日本各地の工芸品を調査するとともに、沖縄や植民地の朝鮮や台湾、南洋諸島の工芸品も研究し、その価値を見出していくことになる。

(2) 「アイヌの見方」『工藝』百六号 日本民藝協会 1941 (12月) pp. 50-65

(3) 「アイヌ人に送る書」『工藝』百七号 日本民藝協会 1942 (3月) pp. 15-27

(4) 幼方直吉「太平洋戦争下における柳の思想と行動」『ちくま』第116号 1980 pp. 11-13

(5) 森田俊男「柳宗悦のアイヌ民族認識」『国民教育』第31号 1977 pp. 170-174

(6) 中見真理『柳宗悦 時代と思想』東京大学出版会 2003 p. 348

(7) 熊倉功夫『季刊論叢 日本文化10 民芸の発見』角川書店 1978 pp. 138-140

(8) 柄谷行人「美学の効用」『批評空間』II-14 1997 pp. 42-55

ほかに柳とオリエンタリズムの関係を論じたものに、小熊英二『<日本人>の境界』新曜社1998や竹中均『柳宗悦・民藝・社会理論』明石書店 1999などが上げられる。

(9) 杉山享司「柳宗悦とアイヌ工芸」『民藝』第600号 日本民藝協会 2002 p. 12

(10) 柳宗悦「手仕事の日本」『柳宗悦全集著作篇』第11巻 筑摩書房 1981 p. 23

(11) このアイヌ民藝品大展覧のときにも金田一が講演を行ない、アイヌ語とアイヌ文化の特性を語っている。

(12) 前掲「アイヌの見方」 p. 65

(13) 同上 p. 54

(14) 同上 p. 57

(15) 同上 pp. 63-64

(16) 「アイヌの文化」『工藝』百六号 日本民藝協会 1941 pp. 16-17

(17) 前掲「アイヌの見方」 p. 65

(18) 北海道旧土人保護法など制度化したものを念頭においていると考えられる。

(19) 前掲「アイヌ人に送る書」 pp. 19-20

(20) 同上 p. 21

(21) 同上 p. 26

(22) 同上 p. 25

(23) 同上 p. 27

(24) 前掲「手仕事の日本」 p. 170

(25) 前掲『工藝』百七号 p. 193

(26) 前掲『季刊論叢 日本文化10 民芸の発見』 pp. 139-140

(27) 前掲「アイヌ人に送る」 p. 52

(28) 同上 p. 56

(29) 同上 pp. 55-56

(30) 前掲「太平洋戦争下における柳の思想と行動」 p. 13

- 
- (31) 前掲「柳宗悦のアイヌ民族認識」 p. 171
  - (32) 前掲「アイヌ人に送る書」 p. 22
  - (33) 前掲『柳宗悦 時代と思想』 pp. 238-239
  - (34) E. W. サイド『オリエンタリズム』（上）平凡社 1993 p. 20（Edward W. Said: ORIENTALISM 1978）
  - (35) 同上 p. 40
  - (36) 同上 pp. 55-56
  - (37) 同上 pp. 58-59
  - (38) 1930年代には旭川，帯広，鶴川他道内各地でアイヌの社会，地域活動が行なわれている。しかし，ここで  
の言動は日本社会に影響を与えるものとはならなかった。
  - (39) 前掲「美学の効用」 p. 43
  - (40) 同上 p. 48
  - (41) 同上 pp. 48-49
  - (42) 同上 p. 54
  - (43) 前掲「柳宗悦のアイヌ民族認識」 p. 173
  - (44) 前掲「太平洋戦争下における柳の思想と行動」 p. 13